## 同志社小学校で大切にしたいこと－外から見た同志社の魅力－

| | |
|---|---|
| 石川 博三 | 同志社小学校教諭 |
| 講師紹介〔いしかわ・ひろみ〕 | |

### 同志社とは何か

こんにちは。同志社小学校で教員をしています石川博三といいます。今日、このような形でお話をさせていただく機会を設けていただけたこと、大変嬉しく思っています。いままで漠然と考えていたことを、この機会にまとめることができました。一時間ほどの話になります。話の前半は私が感じた同志社について、そして後半はいま同志社小学校で大切にしていることについて、お話しさせていただきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。

昨年、同志社小学校の設置準備室に着任して、同志社小学校の立ち上げに関わらせていただきました。そのとき、みんなの思いの中に、「同志社らしい」といわれる小学校にしたいというのがありました。同志社に一度も関わったことのない、いわば外の人間の私にとっては、ある意味で重い命題でした。そこで、「同志社とは何か」ということを、まず、私自身が知り、感じなければならないと思いました。

手始めとして、同志社に関係する書籍を読んでみることにしました。一番分かりやすかったのが、本井先生が書かれた「同志社科目」のテキスト「新島襄と建学精神」でした。この本のおかげで、断片的な知識がつながり、なるほどと腑に落ちたこともありました。あと、「現代語で読む新島襄」は、現代語で読みやすかったので、新島先生の熱い思いが直接伝わってくるような感想を持ちました。

書籍を読んで知識は少し増しましたが、いまを生きる私たちの同志社というものを感覚として感じることはできませんでした。そこで、なるべくたくさんの同志社出身の方に同志社についてお話を伺うことで、いまの同志社について知りたいと思いました。

いろいろな方にお話を伺って、感じたことの一番目は、なぜか同志社大学の歴史的な美しい建物について、語る方が少なかったことです。大学に入って、初めて構内に入ったとき、「きれいな大学にこられてよかった」と思ったという感想はありましたが、建物について熱く語る方には残念ながらお会いできませんでした。唯一の例外は、同志社高校出身の方が、高校のチャペルに深い愛着を持っていらしたことです。それも在学中はそう感じなかったそうですが、卒業してからチャペルのことを思い出す、とおっしゃる方が多かったのが印象的です。

ここで少しお断りしたいことがあります。今日は大学でのお話ですので、聞き取り調査をしたデータや分析を客観的に出したほうがよいとは思うのですが、私の感性といいますか、感覚として同志社をとらえたいと考えていますので、あえて、ある意味漠然とした、自分の主観で感じ取ったものとしてお話しさせていただきたいと考えています。ご了承ください。

### 同志社に吹く新島の風

話を元に戻します。先ほど、建物についての疑問をお話しさせていただきましたが、感じたことの二番目は、学校の柱である新島先生の呼び方についてでした。一般に、学校を開いた創立者というと、新島先生とか新島襄先生というのが普通ですが、多くの方が新島とか新島襄と呼び捨てにされています。もちろん丁寧に新島先生と呼ばれている方もありましたが、ほとんどの方が呼び捨てにされています。なぜ、そんな言い方になるのか考えてみました。話をしていて共通していたのは、みんな新島先生がまるで今でも生きていて、「昨日も会ったよ」「こんなことをおっしゃっていたよ」といったようにお話をしてくださることです。新島先生の話を、目を輝かせてお話をされます。話をしていくうちに、新島襄先生というと何だか他人行儀に感じてしまうため、まるで家族を話すかのように親しみを込めて呼び捨てにしているように思えてきました。新島襄先生、いや、私もこれから失礼ながら尊敬の念と親しみを込めて、新島襄と呼び捨てにさせていただこうと思います。失礼をお許しください。このことは言い方をかえれば、新島襄の熱い思いは過去のものではなく、今も同志社の中に脈々と受け継がれ、生き続けているのではないかということです。学校には人為的に構築されたカリキュラムがあります。その意図的に作られたカリキュラムに沿って授業が行われます。これは、小学校、中学校、高校、そして、みなさんの通われている大学でも共通していることです。そういった、目に見えるカリキュラム、つまり表のカリキュラムとは別に、隠されたカリキュラム、裏のカリキュラムというものが学校にはあります。この裏のカリキュラムとは、一般に校風であるとか、学校の培った伝統といわれるもので、意図的ではなく、その学校に通う人に大きな影響を与えます。私はよく、この裏カリキュラムを、学校に吹く風と呼んでいます。そう考えると、同志社に吹く風は、新島襄の熱い思いという風であり、その風は今も吹き続けていると感じている人が、数多くいるということなのでしょう。新島襄の熱い思いの風を受けたグレイス教会の老農夫は、同志社設立のために帰り道の汽車賃を寄付し、自分は徒歩で帰りました。またある女の人は、持っていたお金すべてであった二ドルを寄付しました。デントン先生は自分のストッキングが破れ、何度も何度も繕って履くほど苦しい生活をしながら同志社女子大設立のために汗を流しました。新島襄の熱い思いが人を変えたのです。

当時に比べると同志社に吹く新島の風は弱くなっているかもしれません。でも確実に吹いています。確実な例をあげます。その人は大学生のとき新島のことは、あまり興味がなかったそうです。名前は知っているけれど、江戸時代に函館から外国に行ったんだって程度の知識だったそうです。卒業旅行で北海道に行くことになったとき、どうしても、なぜだか分からないけれど函館に行って新島襄の海外渡航乗船の碑を見なくてはならないと感じ、計画の中に入れたそうです。現地では、新島襄が当時泊まっていた場所もどうしても見たくなり、どうしてこんなに一生懸命になるんだろうと思いながら探し当て、見つけたときの感激は忘れられないものになったそうです。函館で新島襄の幼名が「七五三太（しめた）」であることを知ってから、新島襄が急に身近な人に思え、そのとき以来「七五三太」「七五三太」と呼ぶようになりました。大学生の間、自分でも知らない間に新島の風を吸いこんでいたのです。それが、卒業旅行をきっかけに出てきたのです。

その人は卒業後、ある経理会社に就職しました。そこでは、一人で机に向かう仕事が中心で、人と人との触れ合いが乏しい職場でした。その人は、そういった環境に耐え切れなくなりました。その人は、人が好きだったからです。最後には、その職場を退職し、いま、同志社小学校の事務室で働いています。小学生の名前をすぐに覚え、笑顔で対応したり、少しでも表情が暗い子どもがいると、とても気にする人です。新島の風がその人を小学校に運んできたように思えてなりません。新島の風を吸うと、人は人とのつながりを意識するようになるのではないかと思います。

同志社関係者にお話を伺って感じたことの三番目は、話の内容の八割は人についての内容だったことです。

同志社高校出身の方の話を紹介します。「学校は自由でした。生徒の自主性を本当に尊重してくれました。そのおかげで私たちは本当にやりたいこと、目標を自分の責任で決めることができました。みんなが苦労して決めているのをみんなが知っているので、それぞれがそれぞれの道を歩もうとすることを尊重することができました。また、それぞれの方向で友達ががんばる姿を見ていると、自分もがんばろうと思えました。先輩もそうだったし、後輩を見ていてもそう思う。私は教員になりたかったから、別の大学に進学しました。進学した大学と同志社を比べてみると同志社のほうが多彩な才能の持ち主がいるように思う。私が出た大学は一概にはいえないけれど均一的な感じがしました」。

別の方は、大学だけ同志社の人の話です。「私は地方出身だったせいか、人前ではっきりと自分の意見を言うことができませんでした。でも、他の人、特に内部進学の人が、自分の意見をはっきりと言うのを見てびっくりしました。でも、もっとびっくりしたのは、お互い意見を言い合うけれど、自分と違う意見を言う人のことも認めているというか、自然と受け入れていることが感じられたことです。こんな雰囲気だから、私も少しずつ自分の意見を言うことができるようになりました。今では何でもズバズバ言えます」。

同志社女子から同志社大学に進学した方は「同志社の人を一言で言うと、偏差値みたいに周りが決めた価値観に左右されない人かな。信念はあるけど、堅苦しくない人が多かったと思います」と話していました。

またある同志社大学出身の人は、「ボランティア活動をしていて、誰かに指示されてから動くのではなくて、自分で考えて動いている人がいて、すごいなと思って話しかけたら同志社出身者で盛り上がりました。自分で考えて動ける人が同志社の強みだと思うし、同志社出身者だと分かると、年齢を超えて、親しくなれる気がします。それが嬉しい。ただ、同志社の人だと、どんな人でもいい人だと思ってしまうのでそれが怖いです。大学生の間は、周りがみんな同志社生なのでそんなこと何も感じなかったのですが、卒業してみてあまり同志社の人に会わなくなった時、初めてそんな感情を持ちました」と話していました。

### 神と人、人と人とのつながり

新島の風が吹くと、人について語りたくなるようです。人と人の関係を考えたくなるようです。マタイによる福音書一六章一八節にこのような文があります。「私も言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。黄泉の力もこれに対抗できない」。

イエスは、ペトロに教会の礎となるように言いました。よく誤解されているのですが、イエスは教会という立派な建物をどんどん建てなさいと言っているのではありません。イエスの言う教会とは、人が二人、三人四人と集い、イエス・キリストについて語り合い、共に祈ることを指していました。建物ではなかったのです。つまり、複数の人が集まり神の愛について語り祈ればそこが教会なのです。ですから、この教室も教会にできるし、廊下だって、生協の食堂だって教会にできるのです。建物の教会は、そういった集まりがよく行われる場所といった意味合いになります。繰り返しますが、イエス・キリストが大切にしたのは富の象徴である立派な建物を建てることではなく、神の元に人が集うこと、そしてその中で生ま

れる神と人、人と人のつながりだったのです。そういったキリスト教を信じた新島襄が求めるものも、必然的に、建物、あるいは建物に象徴される栄華ではなく、神と人、人と人のつながりなのです。このように考えると、冒頭の疑問、なぜ同志社の人は建物についてあまり語らないのか、人について多く語るのかということの答えになるのではないでしょうか。新島の風は、同志社小学校に人を育てよ、神と人、人と人のつながりを大切にせよとささやいていると感じます。

同志社小学校の校歌は、谷川俊太郎さんが作詞してくださいました。谷川さんにも新島の風は吹きました。二番を紹介します。「かんじる　つたえる　おもいやる　からだは　やさしい　ちいさなうちゅう　ひとのいたみ　かなしみみつめ　ほほえんで　てをつなぐ　あすをねがって　いのるきょう　えらいひとになるよりも　よいにんげんになりたいな　どうししゃしょうの　わたしたち」新島襄が求めていた同志社小学校の子どもの姿がまさにそこに描かれているように感じます。私は、この歌を歌うとき鼻の奥がツンときます。新島襄が、そんな学校になるようにがんばりなさいとおっしゃっているような気がするからです。

## 同志社小学校での実践

以上が私の感性でとらえた同志社であり、それは、同志社らしい学校を目指す同志社小学校で大切にしたいことです。それを踏まえて、神と人、人と人とのつながりを育てるには何が必要なのかを具体的に考え、私たち同志社小学校が、いまどのようなことをしているのかについてお話ししたいと思います。

まず始めに、人と人のつながりを意識づけるための実践を紹介します。

（一）「人と人のつながりを意識づける」

同志社小学校では人と人の触れ合いがあり、自分の行動に対し、相手の反応が感じられる活動を常に意識しています。人は一人で生きているのではありません。自分がされたことには敏感ですが、自分の行為によって相手にどのような思いを抱かせるのかといった想像力に欠けている面もあります。そこで、活動の後は必ずきちんと自分の行為や友だちの行為について、ふりかえらせる時間を取るようにしています。具体的な活動内容についてお話します。

まずは「花の日」礼拝についてお話します。「花の日」礼拝の日に一人一本ずつ花を持ち寄り、神様や周りの人からいかに恵みを受けているかについてふりかえり、祈りをささげました。その後、日ごろお世話になっている方々にみんなが持ち寄ったお花と作成した感謝のカードを届けました。受け取っていただいた方々は、大変喜ばれました。喜んでいただいた様子を見て、子どもたちもうれしさを感じることができたようです。後日、給食の調理の方は、子どもたちにお礼にと給食にデザートをつけてくださいました。また交通指導員の方は、翌朝、全児童一人ひとりに「ありがとう。うれしかったよ。カードはわたしの宝物よ」とことばをかけてくださいました。子どもたちは自分の行為で相手がこれほど喜んでくださるのかと驚きさえ感じていました。このように自分の行為に対する相手の反応を確認することで、相手の心を想像させたいと考えています。逆に、こんな場合もありました。

同志社タイムで「狂言」「能」についてお話いただきました。土蜘蛛の説明で、実演していただき児童は大いに盛り上がりました。実演の最後に「能」や「狂言」を教えてくださった方の挨拶がありましたが、挨拶が始まっても子どもたちは興奮したままで、きちんと話が聞けませんでした。「ふりかえり」の活動のなかで、話し手の気持ちを考えさせ、どんなに失礼な行為であったかと指導しました。先の例とは逆に、自分の行為で相手に悲しい思いをさせる場合もあるということも、きちんと教えていかなければならないと考えています。

（二）「自己有用感を育てる」

次に考えたのは、自分に自信をつけたいということです。自分に自信がなければ、人と人のつながりをうまく維持できないと考えています。自信はどのようにつければいいか考えたとき、私たちは自己有用感を育てれば良いのではないかと考えました。では、自己有用感はどうすれば育つのでしょうか。私たちは、①私は人の役に立っているということ、そして、②私は人から愛されている存在であることを理屈ではなく体験させ感じ取らせること、それで自己有用感が育つと考えました。

まず、「私は人の役に立っている」ということについてお話します。

このように感じさせるために、係り活動や当番活動を重視しています。その人の係り活動や当番活動がなければ、クラスや集団が立ち行かないことを実感させようとしています。また、異年齢集団・ワイルドローバー活動として縦割り集団をつくり活動させることにも力を注いでいます。年長の者には責任とやりがいを与え、年少の者にも自分たちの力に応じた役割を与えることが大切です。縦割り遠足では行き先、活動内容、持ち物、注意点を含め年長者である三年生が決め、班員に話をするといった活動を行いました。終業式の「ふりかえり」で発表した児童は、この一学期をふりかえって感謝したい人たちがいると言いました。「楽しかった一学期を過ごすことができたのは、先生、そして、お父さん、お母さん、友だちのお陰です。ありがとうと言いたいです」と。最後にこの児童はこう付け加えました。「でも、一番ありがとうと言いたいのは、ワイルドローバー活動（縦割り活動）で一緒に活動した一年生、二年生の人たちです。私のことをからかう人もいたけど、一緒に掃除をしたり遊んだり、遠足に行ったりしてとても楽しかったからです」。からかわれることも、子どもたちにとって大切な関わりなのですね。新鮮に感じました。

次に「私は人から愛されているということ」についてお話しします。

集団としての児童だけではなく、一人ひとりを大切にすることで「私は人から愛されている」ことを実感させようとしています。たとえば、お誕生日の月には全校生の前でお誕生日をお祝いしました。誕生日カードには校長や担任・副担任が一人ひとり真心を込めて名前を記入しました。カードをもらったときの嬉しそうな顔が心に残ります。また、歯の検査で、虫歯が多く、きちんと歯磨きができていない児童がいることが判明したとき、養護教諭はプリントで注意を促すだけでなく、実際、給食の後、一人ひとりとお話をしながら個人指導を行ったりしました。時間も手間もかかりますが、一人を大切にするための実践です。一人を大切にすることは、日常生活の一つひとつを大切にすることです。漢字ノートの添削を例に挙げると、普通一ページ単位で赤ペンを入れるところを、一文字一文字添削したり、日記に会話をするように先生の感想を書くことなど、一人ひとりの子どもをその子に応じて指導するきめ細やかさを大切にし、子どもと触れ合うことで、私は人から愛されているということを体感させたいと考えています。

## 交わりの中で学ぶ

人とのつながりを大切にするため、いろいろな人との出会いも意識しています。近年、児童に対する犯罪の増加とともに、近親者や教員以外の大人に接する機会が極端に減ってきています。そのため、多様な人に対応する能力が弱くなり、等質のものしか認めない児童を育てているように思えます。多様な人との出会いは、学校が意識的に行わなければならなくなっていると考えています。幸いにも私たちは同志社大学附属小学校なので、大学に多大な協力をいただきながら、人との出会いを実践しています。たとえば、同志社タイムという時間を設けています。今までに、能楽師、狂言師の方、同志社大学応援団、「名探偵コナン」の毛利蘭役でおなじみの同志社出身の声優・山崎和佳奈さんと、山崎さんの友人で江戸川コナン役の高山みなみさん、同志社小学校の校歌を作曲された大中恩さん、同志社大学院生の舘林千賀子さんが介助犬アトムを伴い来校してくださいました。また、同志社大学のプロジェクト科目で三年生は「能」の体験をし、真摯な態度でプロジェクトに取り組む大学生の皆さんと接することができました。子どもたちにとって貴重な出会いになったと思います。その他にも、同志社大学の留学生も日常的に来校し、英語の授業に参加し、一緒に給食を食べたり遊んだりしてくださっています。三年生の校外合宿には、大学生がリーダーとして参加してくださいました。こうした触れ合いが子どもたちの成長にとって財産となっています。

次に、授業で大切にしていることを紹介します。私たちは授業を通して、人との交わりの中でこそ学べるとの観点から、集団の中での学び、学び合いを大切にし、自分の思いを感覚的でなくとらえ、正確に相手に伝えるため、論理的に考え話すことができる力を培うことを目標にしています。

実例をお話します。三年生算数の学び合いの授業では、出題された課題に対し、児童は個々に解き方を考えてきます。それをクラスで発表します。説明者は自らの考えを相手に分かるように論理的に説明をします。その発表に対し、また質疑を交わし、補足説明をします。解法はひとつではありません。いろいろな解法とその筋道について学び合うことが大切だからです。間違った解法は、なぜ間違えたのかじっくり考察し、「ふりかえり帳」にまとめます。こうした活動を通して、論理的な表現や思考を学ぶことができるようになることをねらっています。

ここで少し「ふりかえり帳」についてお話させていただきたいと思います。ふりかえり帳には二つの面があります。

一、授業をきっちりとふりかえり、文章で授業を再現させます。授業を文章でふりかえらせることで、より深く論理的に授業を理解させ、定着させることをねらいとしています。また、ふりかえらせることで、表面的には理解しているつもりでも実は分かっていなかった箇所に気づかせることもできると考えています。

二、算数などで間違った問題をもう一度解かせようとしています。なぜ間違えたのかその理由もノートに書き込みます。そして教師に提出をします。途中までしか分からない場合もそこまでの解法を書き、教師に提出します。教師は解答を読み、アドバイスを書き返却します。分かるようになるまでこれを繰り返しています。

もう一つ、授業で大切にしているのは、学びには学ぶ必然があり、学ぶことが楽しいと感じられるように仕向けていることです。

たとえば英語の授業では、意味もなく英語を暗記するのではなく、児童をファストフードの店員にし、客の役の教員に接客をするという授業を行っています。接客に必要な英語を学年に応じて学び、それを実際に使うことで学ぶ必然を生み出そうとしました。

二年生国語の授業では、単にお話作りをするのではなく、一年生のためにお話を作り、読み聞かせをすることを課題とした授業が設定されました。二年生は一年生のためにということで、話の内容、読み方をいつも以上に工夫を凝らし、真剣に取り組みました。一年生は、憧れの存在として二年生を見るようになりました。

また、暗記だけではなく実際に体験させることが真の興味づけにつながると考えています。三年生理科では、生き物に触れ合い、じっくりと観察させるため、一人一匹の生き物を学校で飼う実践をしています。飼っているものは、昆虫やかえる、小魚といった小動物です。自分の責任で自分だけの小動物を飼うことで、他の人には分からない発見ができます。じっくり観察し生活を共にすることで、一匹一匹の命の大切さも実感できると考えています。

最後に学校生活を凝縮したものが合宿だと思いますので、一年生の学校合宿の様子をお話しします。

一年生で合宿をするのは珍しいと思うのですが、「ようこそ同志社小学校へ」という歓迎の意味をこめ、一年生の教員だけでなく教員全員で合宿に関わっています。一年生をグループに分け、グループにひとりずつ教員が入り、食事から遊び、そして、夜寝るときも一緒に生活します。出しものも一緒に考えます。自分のグループの出しものの順番がくると、ハラハラドキドキして、まるで自分の子どもを見るような気持ちになるのが不思議です。密着した生活を送ることで、人と人とのつながりを感じさせ、深めていこうと考えています。合宿の最後には「ふりかえり」をさせ、グループのメンバー一人ひとりに感謝のメッセージを互いに書きました。友達からもらうメッセージを読むときの嬉しそうな顔が忘れられません。

## 新島の風を胸に

いま、同志社小学校で大切に思っていることや、実際に行っていることについてお話しさせていただきました。

新島襄の風は目には見えません。しかし、新島襄の熱い思いと信念がこの同志社をつくりました。逆に言えば、新島の熱い思いがなければ、いま、ここに同志社は存在していないのです。私たちがここで、この場で、この時間を共有することもできなかったわけです。新島の熱い思いは同志社小学校を設立させてくださいました。同志社小学校は開校したばかりの学校です。右に行くべきか、左に行くべきかと迷ったとき、いつも心で新島ならどう言うか考えます。悩んでいるときほど笑顔の新島の顔が浮かんできます。

皆様の力をお借りし、これからも、一歩一歩、地道に、常に「新島の風」を胸にいっぱい吸い込んで、同志社らしい同志社小学校を目指して行きたいと考えています。

本日は最後までお話を聞いていただきありがとうございました。

二〇〇六年十一月九日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録